茶湯獨り讚 四

454

797
.I5

7043

獨湛山水記 巻四

もくし

御名所のたてさまならびに山水并ニ
上手の立る石其外きみを家ニあり寺
ものなり

一 仙方可作方かくのこと
一 池のかゝり作やうのこと
一 石立やう石の名并ニのこと 并 瀧のこと
一 嶋のかゝり名所のこと 并ニ見やう
一 木のうへやうのこと
一 山水庭同しなしつくりのこと

一 山水畫并に枯山水畫三品

一 書院荘り畫之こと

山水作り様之事

○書院のみすゝ面につくるなり瀧元を東
南より水入ひつしさるの方へなかしやり
式正也
俗所方なしと云ものし縁に合せさすになる
ますきさあるは武家を元に嫌なりかり
やうしいふし丑寅の方は是非にかなはず
○山と谷と岩と泉と里嶋滝も見合
池のかゝら作り也
○書院井の前はのみすゝに八九丈字
小座敷少庭その寸ほりたるよし

池のかめを鶴かめらに浮かべし

○大海形　是ハ池の水石あらく磯を
見するやうにすへし

○大川形　是ハ龍のうつらを見る如く
つゞく水川の方尾をひくる

○山河形　是ハ石を流しとたれかゝりもとし

○枯水形　是ハ野筋を見すれ風情を
もたせべし

○沼形　是ハ石立るにまれにする
水のさし多く見るやうにすへし

○池川形　是ハ白須を見るにて流石

○草平（クサヒラ）形　是ハ野草しきを見すれ
平石を並び平々草を生ず

石立

○立石　平石　仙人石　木走石の名

正面裏ニ三神石守護石
瀧口ハ石に不動石
不動を瀧副石ト云
是八ツ也

○下ニ座石を庭石ト云
○獨ニ童子石
○双へ石に童石

○中嶋ニ　○亀頭石　○ちゝ石

○烏獅石　○尾崎石　○池の烏獅ニ
二挺石　○いとも石　○二王りし
○織口石　○みつ受石　○たま副石
○ゐらゝけ石　○ちし石　○橋たすみ石
○書院まへ手鴻とこまく南しと云字ニ
○客拝石　○對鴎　○履流石
○みたれ石　○みまけ石　○み落石
○須弥けりし　○ちうなりし石　○二の丸迄りし石
見をとみ川石ともいふ　猪武まる鳴
ありて見事之鳴とりふ　字見あるを
○あて居石　○鐘懸け石　○拵さよりし
下面道りま　○孔拝石

奥まて　○山頂りし　○山蹄りし
○慶雲石　○霧隠石　○猪乗りし
○月隠の石　○月名りし　○つまかけ石
山よ　○通り居りし　○中たけ路りし
○吐景石　ひりし出て流れよおちくるつ
山鳴ま　○上座りし　見本のもとと虫
○橋隠の石　○川中石　石よまとあり一面りし　と云
○怪奥石　うらのまとまるり　色鳥り白ら石とつるの
○鎌りし　たちまままつるの
立石まて　○きぎりし　○みの郡りし
○虎濱石　○鶴隠石　○中まんりし

○追り　○硯用ゐし　○筆鋒ゐし
○如意ゐし　○つりぬ石
○立石り　○小切まじ石　○ぶらり肩石
○流くゐし　○補まゐし
○野まりしは石もろぬのめるまひとく
○少年の母はたまたまるとり
○あけ石あはゐしりとれ智有
○川よりけゐし岩まで石いろうも添石とん
つるふしとも瀬の立石木より深ケ碧色
○立り石四り石とも婚也
○瀬の落下より十色あり

○ちりふおち　○ちりおち
○つゐひ落　○うけ落
○ちるまちまだ落　○めぐのおち
○りとおち　○かすも落
○花四ふ落　○よこおち
大隈ふんぬく
○鳴之助しら花凡す
○吹上鳴　○すりくも鳴　○打家ちま
○中しね　○ちあね　○すかりね
○ちでちねりすきちねこ　○入江はりつきつなさ

○家ゝ白○重ゝ白○山白　池のなかのよ
○澤ゝ寺すこし右にて台○芦ゝ白
○岩ゝ白○あら磯嶋○右の白たゝ台
○ませきき○白ち白○いえゝ白
○野ゝ白　河遠くゆうちらいて石ある浦也
○柱ゝ白　平木を平地に間をおき植こし
○御流　○汗漫　まさる見えるとのひらきみゆる
○雲ゝ白　行てし多　○まへする
○兎み嶋　多中に細の筋○渕須淵のごとく
中嶋らゐ亀あり人に見ゆ
まう竹をうゑてよし

亭ゝり
日の門入口乃竹をうゑ候へハ
名を人かし方の加をれすへきさ
○家仙の見様ゝり
山の手家嶋亭鳩とん嶋二つ立あらし
客嶋へ至り左の方をおろ手加けたし
身とつ所に都に風景をとて中嶋乃
礼拝石の前の正面の三神石を立かる
色目指をとてて又客ゝ白へ帰る所
みけ気をとてていみし　名の
○亭の八幡手白のおまたの身をとつき

いろすり鳴るこかけりし家右もと
るとりけるでまりあいある神し
哥る
萬々代もかきらんものもあらね夜
ふうとはきぬいるほろふるん
○砂を蒔うとんかるへし
哥ニ
千代をかさねてもちよのしの
いよ月とたりてこけのむしまて
○宮嶋の暮日の松え松植ん御堂三
千代のかしわすよは
こみわそろしまみ台の雲

かはるまるをかあめすいみしける

○樹を植る事

居下四方に植て吉　一木一草益也
居下今東まむ　西ま　孑孑植て吉
居何分　東ま　至流八　柳を植て　青龍と云
同　西ま　至大道八　楸を植て　白虎と云
同　南ま　至池八　桂を植て　朱雀と云
同　北ま　至岳八　槐を植て　玄武と云
氣を添ぶるなくと云
約為色生其本之吉

○門よりよし　槐よし　柳ハおりおそれあり
○梧桐　南天　ミよう　しゝ　榎
つゝじ　さつき　石楠花　蜜柑　櫟
常木　山茶花ハよきものなり　玉つ　竹うゑまじ
山躑躅　藤之　蘭　紫苑
瑞香　芍薬　菊　萬年草
梔子　女郎花　葛　沈丁花
百合　芙蓉　柘　丁子
麝香　ふし　梅　伊吹　一八　黄楊　鶺鴒
此類大概　なるをと　心得　かり
其外ハ気をつけ候也

まえにあきらかなることあらず　初に見る今ニ者
○山家日本之作なる人
○文德院天王　南殿の山にて
○大政大臣良房の作
○宇多院　昌泰元年よりも家あり
後亭子院より彼のみ仙なりハ
○寛平法皇の御作なり
○白川のみ新家山なりハ
○權大納言義昌卿作
○入道清盛編の新内裏仙なりハ

○大藏の大輔　吾盛に作

後深草院女子　得拝ら愛を和歌を

ひし六　嵩ける作あを　挿あまよ

○仁和寺并沙僧正多遍　作

傳來

應永二年八月下院中納言康ひろ宮の能よ

みめのとし　以安證本ねかにて為秘家し

まこと和歌所のあ主の秘家よろし

同国か別へ写なし

宗祇のとし　小畫中能こならうをを

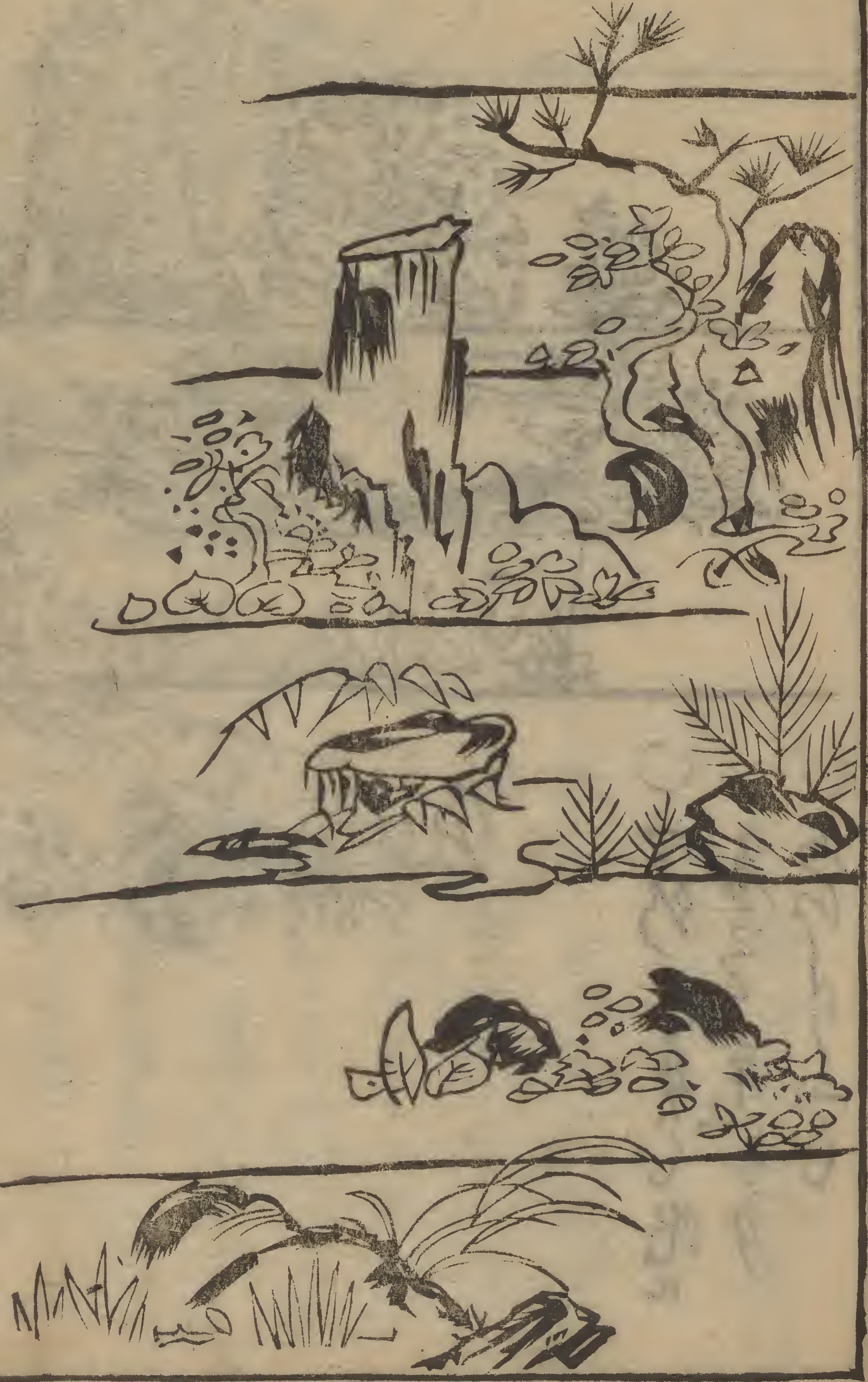
中黒先生写生を以て年子らに求らせ

不動石
布引石
虎演
守護石

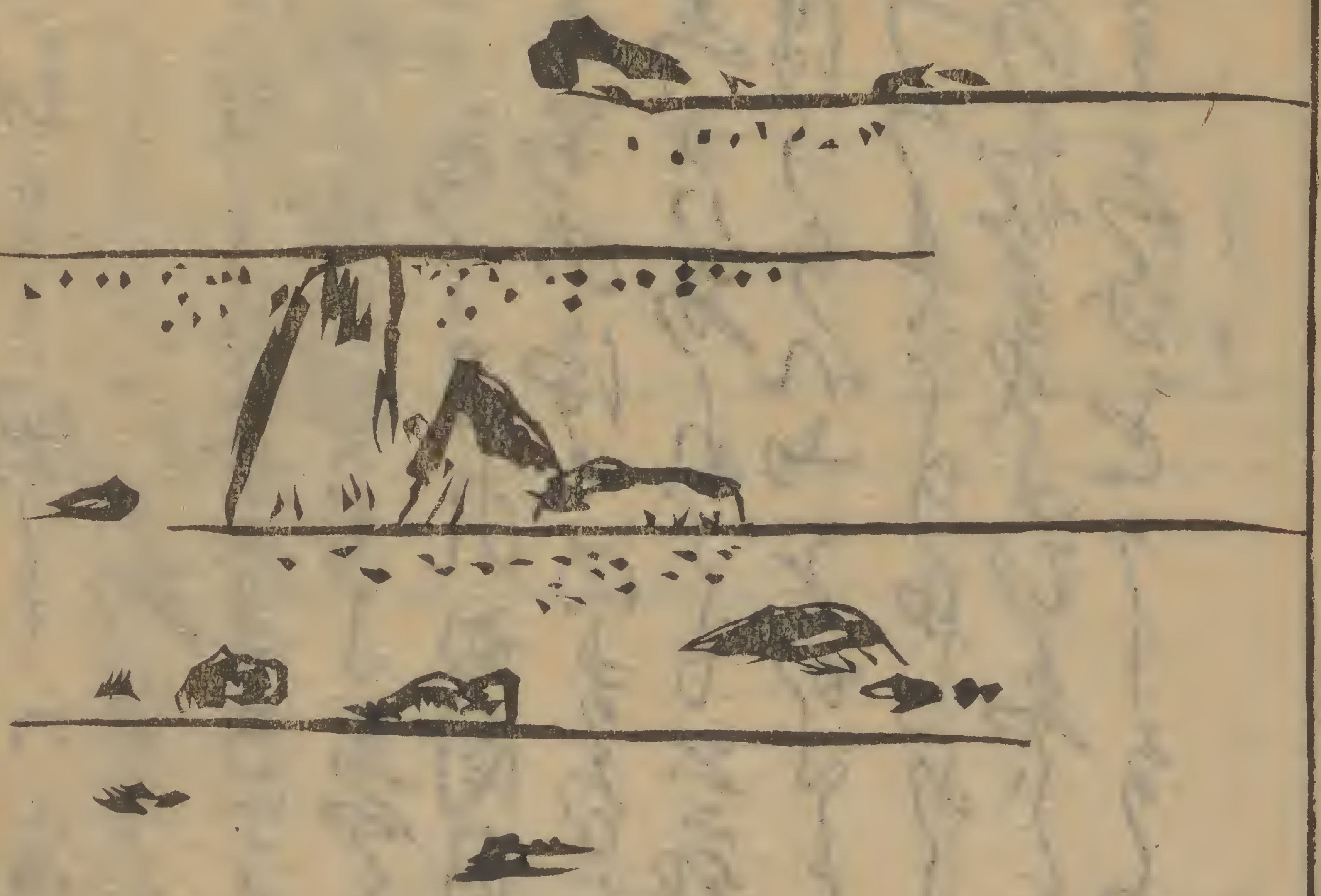
慶雲
硯用
吹上

枯水の庭なとのもじに白砂と
手まへらうさを石あしらふへし

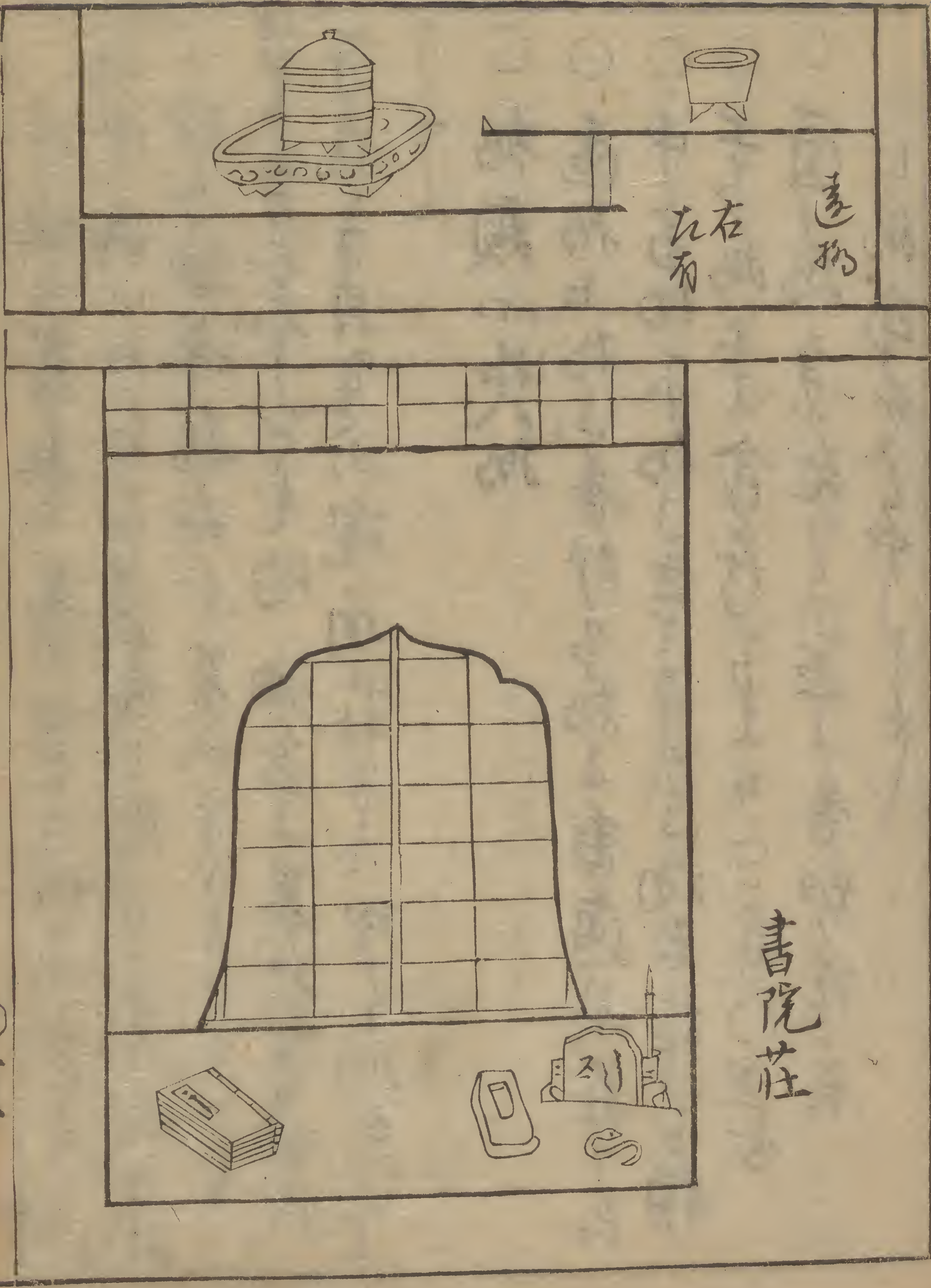
巴立石横のかまえ



○め形本庭に作る
庭の平石平砂も
あしらふへし



○此形無草木小石斗
のまゝあり
是ハりやうあんじの庭
白砂さまの石の
石をひらの庭の
こゝろへんじのうし
也是虎の子わたし
と云形也
平井砂とも云



○しく国しハ庭をつくりすを始る
りりうんあまりもたんぼんつかくなさ
れくを聖色よ今ま都らびや乃
地形国司よ志やくおやんれ止そ丁ん
ふか〻し并れ故国司分三のくさ仙呂を
九系の浄土の中まるのよいりきめし
吉かハあれとも三家民家の方向すきさ
ほうらん山をかりとりめくさしりを
つくりしりやしめさとめやさるんを然
の雅蔵よ正義しよまやわぶれとを字
至志多をうすさ仰なりと分て(之)

○書院に荘る之　器のかざりハよろしき事之の
荘也　或ハ文ちん唐墨筆とを荘りとも　或ハ筆架
る　かざり硯筆　掛物香合　花入　かうろハ水入
水うさん筆　とも洞　文鎮に筆架なと代
香炉　香具などの硯箱荘るやし　かざり地云つて
うらし

○椀類四組八組

○遠椀　上椀に香炉　下椀に香箱　具荘て台

○中高椀　下椀に立て　其のまゝ物台荘つ　杯類

○上下椀　上に食籠　下に茶ちん二食籠盆

○面ノ椀　ろすが先ある盆に香炉荘台

け椀　常恋ゆへりしや

○阜椀ハ大香炉　作り物など荘

○脇く椀に　上椀ハ渇瓶などにしてよろしき盃杯

かざるけれども食籠御ものなど云

○通ひ椀　上椀に玉類もよろしき盃のも

又猶に物ま羽帚杯荘

○硯箱　椀ありんごん杯荘てよし

○あつまりなる　上なん乱　大いに乱盃のら

○銚子　上椀に下へ行く　其の白帚ニのも

下のみちくにハ香炉香合添入籠やし

○御物椀　香合椀ちらけたるこよし

○奥よりハ二ヶ所の類　下のこすと中分分ヶ類二

つ近椀し　常せ所ずハうそり椀と花もりし隣

[illegible]

○ [illegible]

○ [illegible]

[illegible]

○ [illegible]

○ [illegible]

○ [illegible]

[illegible]

○ [illegible]

[illegible]

○ [illegible]

○ [illegible]